風土記の解說

藤田元春

風土記は我國の地誌として最も古いものであるが世界に存する古地誌に比べても珍らしい有益な地誌である、續日本紀の元明天皇紀に「和銅六年五月甲子、畿內七道諸國郡鄕名著好字、其郡內所生銀銅彩色、草木禽獸、魚虫等物具錄色目及土地沃瘠山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事載史籍言上」といふ譯がでゝゐる。つまり奈良朝の初に出來たものである、當時は實に漢學が盛んであつたが、一方に國學も盛で、萬葉集といふやうな歌集が出來て、漢學に精進した學者も競ふて御國振りを詠じると全時に、民間の賤の女までがほがらかな情調を歌ひ出てゐるといふ時代で、或意味に於て日本文化の獨立したことをつげる、外國に對する國家意識も大に發達したので官撰の日本紀や、古事記などが編著されて、我等の祖國の古代からの發展を成文に錄するといふ時代になつた。これ實に日本文化の獨立自覺の黎明期といふべきであるがこの際右の日本書紀編纂の資料ともなり、政治向の參考に供し給はんとして、諸國に命じて其土地の物產とか、山川原野の名の起りとか、古老の傳說を書かしめられたのである。しかしこの時全國一樣に風土記が同時に出來たか否やは明でない。二百年をへて醍醐天皇の延長三年になつて、藤原忠平の宣で再び風土記の再提出を求められた。この際古くからあつた風土記をさがして出せ、もしなければ探訪して書き出せといふことであつた、これも延長五年に撰進の左大臣藤原忠平の主宰した延喜式編輯の材料になつたことゝ信じられるから、式の各國郡に關する

細密な物産や調貢、さては交通等の記事は、この延長の風土記に載せられたものとひとしかつたと考へられるのである。故に式をみる上から恐らく風土記は延長には殆ど全國六十八州に亙つて撰進されたことであらう。しかし不幸にして今日に殘存するものは常陸・播磨・出雲・肥前・豐後の五風土記と、多くの書籍にのこつてゐる風土記逸文が四十一國にわたるに止まる。これは長い暗黑時代に古本が破損もし無くなつたので、これが德川時代に發見されたとき、既にいたみが出來てゐたから出雲風土記の外は完本ではなく、或は始がかけてゐ、或は終がかけてゐる。

出雲風土記は天平五月二日卅日勘造といふ文句があるので明に其出來た年代がわかる。さうして其記事は地誌として整頓したものであつて九郡六十一鄕一百七十九里あつた。各郡それ〳〵立派な學者が揃つてゐて、之を記した、と察しられる。さうしてこの書には水東水臣津命が、シラギ、サキ、ヌナミ、コシの國々から國を引きよせたといふ傳說をしるしてゐて、古代の日本海の航路の發達をつげるといふ特色がある。つぎに常陸風土記は河內眞壁二郡を缺いてゐるが、この本は藤原宇今が大守であつた時、養老年間に其下役に高橋虫麿といふ學者がゐたので、その手で出來た本であらうといふことになつてゐる。この方はいかにも立派な美文であつて、東海道最奧の避阪に、よくもかうした學才が、千二百年の以前に居つたことぞと感心させられる文章がある。播磨風土記の方も亦卷首明石郡をかき赤穗郡がないが賀古郡以下他の八つの郡志は殆ど揃つてゐる、この方も和銅年間の古書であるといふ證據があつて、樂浪の河內といふ人の作であらうといふことになつてゐる。

現在の五つの風土記の中で特に重要なのは右の三書であるが、肥前及豐後風土記の二本も決して見劣りのするものではない。

學者の中にはこの風土記に傳說や神話があるのをみて、極めて幼稚な地志だと解する人もないではない、けれども、その傳說によつて古代史を訂正しうるといふ所、例へば天日槍が神代の人であるといふことが播磨風土記によつて說明されるといふやうなこと、又は高天原が地上にあるといふ見解が常陸風土記に記されたりしてゐるので、歷史の上に、有益な資料を供する、幸にもこの三書は一つは東海の避隅で日高見國即アイヌの居つたといふ土地の記錄であり、一つは近畿の播磨、一つは古代文化の一中心であつたと考へられる出雲といふ三ケ所が記されてゐるのであるから、全時記錄としてこれを讀むことによつて、東海道から陸奧の方へ文化がすゝむで行き、孝德天皇以前の日高見國が白雉四年に新しい仁太郡となり、多珂、石城の二郡が同じく大和朝廷の下に歸服しはじめて、郡治をしかれたといふやうな記事があつて、日本の文化が東北へ進んで行つた時代と歷史をかたり、播磨ではそこへ移住したシラギ人や韓國の人の外に山陰道の各國人、河內、攝津、讃岐、筑紫の人々などが往來した事實をのべてゐて、瀨戸內航路の發達してゐた樣子をつげ、出雲風土記によつて、鄕里の制既に此國に徹底し、他の國ではまだ見なかつた佛敎寺院、僧敎昊が意宇郡に建てた五層塔の外に、新造院三所、其他宍戸湖に近い各郡いづれも寺院のいらかが一所又は二所造營されて王城に於ける天平文化が、殆ど全時に出雲に出現しはじめてゐたといふやうなことがわかる、つまり古代新羅への海上交通の要津であつた熊野の海上からの移入した文明でこの地は外の地方よりも遙に先頭に立つてゐたことが理解される、かやうにしてこの三國の風土記がある御蔭で、日本の文化の中心たる大和に發生したあらゆる社會事相が、其の土地の文野如何によつて遲速はあるが、結局はその傳播する王化に從ふものであるといふ事が明になるのである。

これを國語學、國文學等の上から、又は神話學の上から一々傳說を見るときには、また格別の面白味もあることゝ信じるが、地理學者の立場からして、風土記は實に我國文化の發展、古代に於ける政治の進步をつげる重要な指針であると信じる。かうした古書が既に散逸した古書の中から、よくも殘り、それが、德川三百年の太平の間にあちこちの古い庫から出れば、やがて之を註釋する篤學者が出て、今日我等の前に五風土記、四十一風土記逸文が展觀されるといふことは何といつても有難い御國であると云はねばならない、易世革命の國であつて、前代の信仰、寺院又は御家柄などいふものゝ倏忽の間に失はれてゆく土地とちがつて、流石は悠久なる御國體であればこそ、片田舍の古い社家に或は寺院に、或は素封家に、かうした文書が殘存し得たのである、さうしてかゝる古文が千二百年もそのまゝに子孫に傳はるが如きは、到底今日の他の國々では見ることを得ない點である。ひとり內地のもののみではない、隣邦支那では、宋の刻本といへば、既に稀覯の珍本であつて、白氏六帖の如きその影寫本が「三十五圓」もする。原本は既に日本に賣られて萬金だといふやうな時代に、我國には唐代の古本が金澤文庫や足利文庫にのこつてゐて、それによつて夙に山井鼎は「七經孟子考文」といふ立派なものを作り、將軍吉宗がこれを支那に送つた爲めに彼國の學風を一變したといふやうなこともあるのである、其他現存の古本は獨り白氏六帖のみではない、彼國の學者王國維や羅振玉なども、我に來つて古の典籍を見て感嘆せざるはない、恐らく今日以後に於ても、高野山や叡山其他の深山大澤から、いついかなる古書が出まいものでもないらしい、これ實に日本國家社會組織の亂れない結果でなくてなんであらう。我等はこの點に於ても御國體を擁護し奉らねばならない、この段やゝ脫線ではあるが、風土記を解して思はこゝに至る、綿々たる臣子の情であると諒察されんことをいのつて擱筆する。